

緒 言

関西大学博物館の考古学資料「本山コレクション」は、本山彦一（1853～1932）によって大正から昭和初期に蒐集されました。本山は、明治36（1903）年に大阪毎日新聞社第5代社長に就任し、昭和7（1932）年に死去するまで同職を務めました。本山は、大阪で有力な言論人として新聞社を経営する傍ら、広く殖産興業や農業振興、皇陵巡拝運動、慈善事業などを主催した啓蒙的財界人でもありました。大正年間から昭和初期には、旧制大学昇格を目指す関西大学の評議員も務めていました。このように多様な活動を繰り広げた本山は、自身のコレクションをどのような意図で蒐集したのでしょうか。また、彼のなにわ大阪への思いはどんなものだったのでしょうか。

大正から昭和初期という時代は、日本国内で大阪の経済的・文化的な地位が最も高まった時代であり、さまざまな都市計画や経済振興、高等教育環境の整備がおこなわれた時代でもありました。また、富国強兵をスローガンとした社会に、「ひずみ」や「影」が生じた時代でもありました。この時代の本山は、大阪毎日新聞を全国紙に発展させ、その広い活動範囲から社会的、思想的にも、最も「大阪」を代表する人物あったと考えることができます。そのような立場にあった本山は、この問題にどう対応しようとしたのでしょうか。

本山彦一という人物は、大正から昭和初期の新聞社の経営者として、言論界や経済界、さらには皇室崇拜という側面からもさまざまに研究され、多様な評価をされてきました。本山の業績や成果は各分野において個別的に評価されてきましたが、総合的にそれらを総合して有機的に結びつけた研究は十分ではありませんでした。私たちは、なにわ大阪、関西大学と博物館が収蔵する本山コレクションという観点から、本山彦一という人物像を多角的総合的に理解したいと考えました。

本研究では、本山のおこなった社会事業や殖産興業、農業振興などのほか、本山の設置した富民協会と農業博物館について調査しました。さらに、もう少し射程を延ばし、本山の推進した学術振興や農業博物館に設けられた本山考古室、その後の関西大学博物館に引き継がれた「本山コレクション」を調査しました。大きく3つの領域「大正期大阪と本山彦一、大阪毎日新聞、関西大学」「本山彦一の社会事業と富民協会農業博物館、本山考古室」「本山彦一の大正期近畿地方先史時代遺跡調査」を設定し、これまで断片的に評価されてきた本山彦一を、新たな人物像に再構築して示すことを目指しました。

調査研究の成果としてここに収録された報告によって、本山が精力的な活動をおこなった、大正から昭和初期の「なにわ大阪」の一端を描き出したいと思います。この調査研究に対してご助力、ご協力くださいました方々に、心から篤く御礼申し上げます。

2020年3月14日

関西大学文学部教授 関西大学博物館館長
研究代表者 米田 文孝

